「丸太が何十本も…つぶされそう」コロナ後遺症と闘う19歳　『終わらないコロナ』前編　コロナ５類移行２年の今、思うこと【長野】

2025.5.8 テレビ信州

https://news.yahoo.co.jp/articles/43b2bb24f65c90910ba68d68bd4faa7278cede32

新型コロナが２類から５類に移行して、８日でちょうど２年になります。

普段の生活を取り戻し、新型コロナが過ぎ去ったかのような雰囲気も広がっていますが、その一方で、後遺症と闘っている人たちがいます。

国の調査ではコロナ感染者の１割から２割が後遺症に悩まされているというデータもあり、中には重症化するケースもあります。

コロナ禍の対応に追われていた松本市立病院。

ピーク時には、１日平均30人を超える患者が訪れ、発熱外来の受診を待つ車の列ができていました。

しかし、５類になった今は、発熱で訪れる患者数数も３分の１ほどに減り、その車の列も消えています。

【松本市立病院　佐藤吉彦院長】

「病院にいるとコロナの患者が来るし、以前と比べれば減ってはいるが、まだまだ治療が必要な方が月に何人もいるので、収束したとは言い切れない」

取り戻しつつある私たちの生活。

でも、その裏では、新たな課題も生まれているといいます。

【松本市立病院　佐藤吉彦院長】

「多くの方は味覚障害などいろいろな症状が出ても時間とともに良くなっているが、なかなか２か月３か月たっても症状が消えないとか」

「“コロナの後遺症”は重症な人もいる」

岡谷市に住む、山田幸奈さん19歳。

今年のゴールデンウイークも旅行へ行くことはかないませんでした。

幸奈さんは、２年半前から全身に力が入りません。

医師からは…。
新型コロナ後遺症と診断されました。
新型コロナ後遺症は、コロナ感染から 3 か月以内に発症し、他の病気では説明できない症状が 2 か月以上続く――。
世界では、そう定義されています。
けん怠感や思考力の低下、体の痛みなど症状は実に 200 種類以上。
国の最新の調査ではコロナに感染した人のうち、1 割から 2 割が後遺症を発症するという結果も発表されています。
【山田幸奈さん】
「体が重いし丸太が何十本も乗っているような感じでつぶされそうになるし」
もともと、体を動かすことが好きだった幸奈さん。幼い頃から発達障害がありましたが、毎日の学校が楽しみで小中学校は、皆勤賞でした。
しかし、高校 2 年生だった 2022 年の 9 月、日常が一変しまします。
新型コロナに感染。
予防のため、ワクチンは 3 回接種していましたが、40 度を超える高熱が 2 週間ほど続き、肺炎を併発。
入院するほどの重症でした。
陰性になった後も、全身に丸太が乗っているような感覚が消えません。
【山田幸奈さん】
「頭痛いとか、だるいというか疲れちゃうとか」
最もつらいのが・・・。
味やにおいを感じないことです。
【母：笑子さん】
「もうちょっと食べよう」「おーい」「もうちょっといける？」
【母：笑子さん】
「初めての介護、自分たちの親をみる介護と違って、自分の子どもをまさか介護するとは思いもしなかったので」
「そのうち良くなるだろうって思っていたら、全然良くなっていかないまま悪化していって」
幸奈さんは、4 人きょうだいの一番上。家族みんなで協力して、支えています。
【弟】
「早く治ってね」
【父：博章さん】
「生活全部変えちゃっていますから。本人のやりたいことも全部できない状態にしていますし」
こうした後遺症の患者は幸奈さんのほかにも…。
埼玉県に住む 49 歳の男性は体の痛みが治まりません。
1 日の大半をベッドで過ごし、今は 70 代の両親の支援を受けながら生活しています。
【男性】
「頭も苦しくて何も考えられないですし、息切れがものすごくて」

山田幸奈さんを新型コロナ後遺症と診断し、多くの患者を受け入れている病院が東京にあります。
渋谷にあるヒラハタクリニックです。
院長の平畑光一医師。
2020 年 10 月にコロナ後遺症の専門外来を開設しました。
ただ、今のところ、治療法がないため対症療法で痛みを和らげたり、生活改善をアドバイスしています。
【ヒラハタクリニック　平畑光一院長】
「論文によっては 200 種類以上の症状があると言われていて、症状も軽い方からすごく重い方までものすごくいろいろなパターンがある。一言でこれが後遺症ですというのは、すごく難しい」
これまで診てきた後遺症患者、7600 人余りのデータです。
多くの人が訴えるのは、倦怠感、気分の落ち込み、さらに思考力の低下や頭痛、不眠。味やにおいを感じないなど、人によって症状はさまざまです。
【母：笑子さん】
「こういうふうにになっちゃうので」
突然体が動かなくなり、何もできなくなった幸奈さんに、周囲からはこんな言葉も一。
【山田幸奈さん】
「気の持ちようとか、甘えているとか、赤ちゃん返りしているとか、いっぱい言われて、つらかったし」
患者の中には医師からも理解されず、「気持ちの問題」と突き返された人も少なくありません。
【ヒラハタクリニック　平畑光一院長】
「山田幸奈さんに関しては症状がちょっと普通の方とは違う。脱力がメインなので。特異なケース。重症の方のかなでもかなり重い方ということになる」
「コロナ後遺症で苦しんでいます」
社会的な課題として声をあげている人たちもいます。
おととし 11 月に発足した患者と家族の会はこれまで、街頭での署名活動や SNS で支援を訴えてきました。
【全国コロナ後遺症患者と家族の会　共同代表】
「コロナ後遺症に対しての医療確立や治療をしている間の経済的支援というものの特別な手当・支援がないままに来ている」
「国として支援をしてほしいということで」
新型コロナ後遺症。
英語でロングコビット、そう呼ばれています。
つまり、コロナの症状が長く続くことを意味しています。
後遺症の原因は、人が本来持っている抵抗力、
つまり、〝免疫〟が深くかかわっているのはないか？
治療法につながる研究を進めている大学があります。
「こんにちは」

「京都から参りました。宇野と申します」
「よろしくお願いします」
免疫の働きと後遺症の関係に着目し、原因や発症の仕組みを調べている京都大学研究チームのメンバーです。
【京都大学大学院 宇野俊輔医師】
「味覚・嗅覚は変わりなく？」
【母：笑子さん】
「変わりない」
【京都大学大学院 宇野俊輔医師】
「でも、コロナの後からですよね？」
【母：笑子さん】
「そうです」
研究チームは、これまでにコロナ後遺症と診断された 100 人以上の血液を調査。
この日、幸奈さんの血液を採取して大学に持ち帰り、免疫の乱れ＝異常がないかを調べます。
今回、両親の希望を受けて、私たちがが調査を依頼しました。
【母：笑子さん】
「9 月 7 日で（コロナ感染から）2 年目迎えて、治る見込みがあるのかもわからない中いるので、お願いいたします」
【京都大学大学院 宇野俊輔医師】
「最善を尽くしたいと思いますので」
今、幸奈さんの体の中では何が起こっているのか？
【京都大学大学院　上野英樹教授】
「この上にプカプカと浮いている白い層、免疫細胞が一番入っている白血球の部分ですが」
免疫細胞に関する国内最先端の研究である、手がかりが見えてきました。
【京都大学大学院　上野英樹教授】
「光が見えてくる感じですね。」
コロナ感染者の 1 割から 2 割が後遺症に悩まされているというデータもあるなど、決して他人ごとではない、新型コロナ後遺症。
シリーズ２回目は、最新の研究から見えてきた手がかり、そして、二十歳を目前にした山田幸奈さんの今の願いをお伝えします。